MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2019. 12. 24　発行元

第 22 号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

仁木悦子ベスト表

かつて、結城昌治と並んで、私が好きな作家として挙げていた仁木悦子。周りの人たちに向ける温かい眼。数あるミステリの中では、特段に優しい気持ちになれるものが多かった。私にとっては大作家の一人！！

『猫は知っていた』からの出発

仁木悦子は、昭和３７年に雑誌『宝石』誌上で短編を発表した後、その年に最初の長編『猫は知っていた』で第２回江戸川乱歩賞を受賞した。これが出発点である。

最初の２長編を読むと、素人っぽさが残り、いかにも初々しい新人といった感じだが、その後の作品をたどっていくと、その成長の度合いは素晴らしいものがあったと思う。

立風書房の長編全集・短編選集

私が仁木悦子の全作品を読むきっかけとなったのが、昭和５１年から出版され始めた立風書房の長編全集。黄色の表紙のソフトカバー。全５巻で、１０編の長編が収められていた。

初期の作品は、トリック重視で、謎解きに力点を置いた本格物の仕上がり。それが、後期になると、物語性が重視されるようになり、作者の人柄がよく表れる作風になった。穏やかで、優しく、温かい描き方が好感を呼ぶ。

当時、よく「日本のクリスティ」などという賛辞がつけられたが、私にはクリスティとの共通性はあまり感じられず、正統派ハードボイルド風の、淡々とした筆致の中に、表には出てこないけれども、温かい想いが伝わってきて、印象深かった。

まもなく立風書房から短編集もまとまって出されるようになり、角川文庫版の短編集シリーズも開始された。

そんな中で、私は仁木作品の魅力に取り付かれたのだった。現在、どこの図書館の本棚にもほとんど並んでいない。若い人に読んでほしいなぁと思う作家である。

短編に上質の作品多数

仁木の作品はそれほど多くない。本の形になっているのは、右の「ベスト表」に示したくらいである。長編が１１冊。短編集が１４冊。

もちろん長編の方が「ベスト表」の上位に位置するが、短編にも好作品が多い。ゆっくり、じっくり読んでもらって味わってもらえるならありがたい。

《仁木悦子作品のベスト表》

１．冷えきった街
２．林の中の家
３．殺人配線図
４．灯らない窓
５．青白い季節
６．二つの陰画
７．枯葉色の街で
８．黒いリボン
９．みずほ荘殺人事件(短)
１０．猫は知っていた
１１．凶運の手紙
１２．刺のある樹
１３．夢魔の爪(短)
１４．死の花の咲く家(短)
１５．赤い猫(短)
１６．陽の翳る街
１７．暗い日曜日(短)
１８．三日間の悪夢(短)
１９．銅の魚(短)
２０．緋の記憶(短)
２１．夏の終る日(短)
２２．赤と白の賭け(短)
２３．一匹や二匹(短)
２４．聖い夜の中で(短)
２５．青い風景画(短)

私の住んでいる市の図書館にはＹＡコーナーに新しい版が３冊ぐらい置いてあるようだ。(なんでＹＡなのかな？と思うけど…)

私の自宅の本棚には全冊ある。最後の本になった『聖い夜の中で』まで含めて全部。

海外ミステリ
この1冊・連載 12

ウィルキー・コリンズ『月長石』

（やっぱり、ここに本の表紙の画像を載せたくなってしまうなぁ。）　創元推理文庫を読み始めた大学生の頃、「こんな厚い本、果たして読めるのだろうか」と“畏敬の念”を持って書店の棚にある背表紙を眺めていた記憶がある。今になってみると、京極夏彦作品などがあって、７８０ページなどというのも驚きではなくなってしまったが。

なんと１８６８年の作である。ポウの『モルグ街の殺人』が１８４１年だから、その次の時代を、ウィルキー・コリンズとチャールズ・ディケンズが埋めたことになる。その意味では、確かに古々しい小説ではある。「月長石」という秘宝を中心に、流れ流れる大河のような物語が続く。秘宝の行方と、意外な犯人。ミステリの形がしっかり出来ている。「至上不朽の名編」と呼ばれるのも当然のことかもしれない。

コリンズには、この作品に先立つ『白衣の女』という有名作品がある。私の手元にあるのは、１９７８年の国書刊行会版でⅠ・Ⅱ・Ⅲの３分冊。これまた非常に長い。布貼装丁でつるつるの手触りがとても良い。高価だった。１冊２５００円。若かった当時は買うかどうか躊躇う値段だった。